

京都と鎌倉

歴史のなかの二都物語

井上 章一

国際日本文化研究センター

リオデジャネイロで、「京都からきました」と言う
と、よく微笑をさそいます。にんまりされることが、し
ばしばある。ごぞんじでしょうか。リオには、“Kioto”
という会社があります。害虫駆除を仕事にしている会
社です。リオの市民は、台所にゴキブリがあふれだす
と、“Kioto”に電話をする。すると、“Kioto”からゴキブ
リ退治の専門家がやってくる。「“Kioto”からきました」
と、あいさつなんかをして台所へあがりこむわけだ
す。私が「京都からきた」と言って、よくわらわれたの
は、そのせいでしょう。

おかしいなとは、思いました。ブラジルには、
“Amsterdam”という宝石商があります。“Copenhagen”
というチョコレート屋もある。アムステルダムが宝石
で、コペンハーゲンがチョコレート、なのになぜ京都
がゴキブリ退治なんだ。はじめ、私はそのことで、なさ
げなく思いました。リオにはあとひとつ、富山＝
“Toyama”という会社がありました。やはり、害虫駆除
の会社です。どうして、日本の都市名が、そういうところ
に、ひろわれるのでしょうか。考えさせられます。

リオデジャネイロの話がつづいて、不快感をいだか
れたでしょうか。「ここは、サンパウロだぞ。カリオカ
の話なんかするな」と。では、サンパウロの話にうつり
ましょう。サンパウロの街にも、害虫駆除の会社はあ
ります。“Osaka”とか“Tokio”、大阪、東京の名がつか
われているそうです。リオだけではないんです。サン
パウロも、パウリストも、いっしょです。ブラジル人た
ちは、日本の都市名で、害虫駆除の能力をあらわそう
とする。日本には、ゴキブリをやっつけてくれる力が、
期待されているのでしょうか。

どうしてブラジル人が、日本の都市名をそういうと
ころでつかいだしたのかは、今、問いません。私にか
わって、誰かしらべてみて下さい。ブラジルにおける
日本像形成をめぐる、いい研究課題になると思います。

都市についての偏見は どのように形成されるのか

今日は、都市像の話をしてします。ある都市、たとえば京
都についての思いこみは、どのようにしてかたちづく
られるのか。偏見は、いかに形成されるか。そんなこと
を語りたいと、思っています。リオデジャネイロの
“Kioto”については、話の枕にちょうどよいと考え、頭
のところでふりました。

都市についての偏見と言えば、サンパウロとリオデ
ジャネイロの間にもあります。サンパウロの人たち
は、よくこう言います。「リオの間は、あまりはたら
かない。あそんでばかりいる。時間はまもらない。彼ら
といっしょに仕事をするとは、できない」と。

私たちの研究所が、以前にサンパウロ大学で、国際
共同研究集会をひらきました。その講演者をえらぶさ
いに、私はある若い作家の名をあげました。でも、しり
ぞけられたんです。「リオの人でしょ」という理由です。
ああ、溝はふかいなと、そう思い知らされました。

もちろん、リオデジャネイロの側でも、サンパウロに
たいしては、先入観をもっています。「彼らには心のゆ
とりがない。いつも、せかせかしている。人生をたのし
むことが、彼らにはできない」というわけです。リオも、
まけてはいないわけです。かたほうがビジネスマンな
ら、もういっほうは芸能人でしょうか。アリとキリギリ
スかもしれません。京都はゴキブリらしいのですが。と
にかく、たがいに偏見をいだきあっているわけです。

この常套的な物言いは、いつ、どのようにして、でき
たのでしょうか。カリオカが、ぐうたらなサボリ人間
として想いえがかるようになった、そのきっかけは
何なのでしょう。私は、そういうことをしらべてほ
しいと思います。「カリオカは超歴史的に、本質的に
人間として墮落しているんだ」なんて言わずにね。偏
見がかたちづくられる、その歴史的契機に、目をむけ
てほしいものです。

東京奠都を契機に 「腐敗の都」となった京都

本題に入ります。京都の話を、ここからいたします。京都と東京との距離は、500kmぐらいでしょうか。サンパウローリオデジャネイロ間と、おおよそ同じです。そして、京都はかつての首都でした。日本の天皇が、京都をすてて東京にうつったのは、1868年です。旧首都であるということでは、リオデジャネイロと、よく似ているかもしれません。観光都市であるという点もそうです。

日本の天皇が、京都にうつりすんだのは、8世紀末からです。以後、官僚機構にささえられながら、律令制とよばれる統治のしくみを、たもちつづけます。このしくみは早くから形骸化してしまっており、とりわけ11、12世紀になると、ほころびがきわだつようになりました。12世紀には、軍閥貴族＝武士、のちのサムライたちの台頭もあって、官僚支配は弱体化されてしまう。12世紀後半には、とうとう平家とよばれる軍閥貴族のひとつが、首都の統治機構をうばいとります。

しかし、そんな平家の統治を、こんどは源氏とよばれる、もうひとつの軍閥がうちたおしました。そして、源氏は、彼らじしんの中枢を、鎌倉というところへおいています。東京と同じ関東地方にある鎌倉です。彼らは、その拠点を、京都からはなしたのです。

私たちは、おさないころに、この歴史を、こうなりました。「平家は京都にとどまったおかげで、武士としては墮落してしまった。歌やおどりなど、芸事にかまけ、ふぬけになってしまったのだ。だけど、源氏は京都をさけたので、すこやかな武人の都を、関東地方にいとなむことができている」。このように、おそわったのです。京都は腐敗と墮落の都市で、人をろくでなしにしてしまうが、関東では健全さがたもたれる、というわけです。

20世紀後半の歴史学を代表する石母田正なんか、こんなふうに書いています。

「平安京における大部分の人間は、歴史的に不要な人間の集団であって、この世界に組入れられた者は、その出身と階級を問わず、頽廢の運命を負わされていたのである」(『宇津保物語』についての覚書——貴族社会の叙事詩としての』1943年)

ひどい話です。しかも、これは学術論文での指摘です。審査員もいる学会誌が、これをみとめたわけです。京都の人間は、くさっているということ。

大人になって歴史を勉強しはじめたころから、私は思ってきました。鎌倉の、関東のどこが健康的だというのか。血で血をあらう、殺戮のくりかえされた鎌倉の、いったい何がすこやかだというのか。あほなことをぬかすな、と。

京都にいと人間はくさってしまう。関東にいと、武人としての気構えがゆたかにはぐくまれる。こんな日本歴史の書きかたがはじまったのは、天皇が関東の東京へうつってからです。それまでは、ありませんでした。私のしらべた範囲では、田口卯吉の書いた『日本開化小史』(1883年)あたりが、そのさきがけになります。そして、これがそのまま、歴史記述に定着する。帝都になりおさせた東京が、歴史を書きかえたのです。それまでは、くさっていると言われていなかった京都が、東京時代以後、腐敗の都として歴史のなかへ、位置づけられていくのです。

リオデジャネイロが、首都の座をゆずったのは、いつごろでしょうか。カリオカ＝怠慢伝説の普及も、都市史的な変化にねざしているのかもしれません。いちどしらべてみて下さい。

関東を美化したいがゆえの名称 「鎌倉時代」

源氏が鎌倉に軍事拠点をおいしたのは、12世紀末です。そして源氏とそのあとをついだ北条氏の鎌倉は、14世紀のなかごろについえさりました。今の日本史叙述は、この時代を、鎌倉時代と名づけています。しかし、これも東京遷都以後にうかびあがった名称です。関東の現東京政権につかえる歴史家が、軍事拠点の関東におかれたことをよろこび、ことほいだ。そして、鎌倉時代という名をあたえてしまったのだと思います。

じっさいには、行政、立法、司法の中枢は、その多くがまだ京都にとどまっていた。鎌倉にうつされたのは警察力や軍事力の拠点でしかありません。商業の、社会の、そして文化の中心地は、あいかわらず京都でありつづけました。鎌倉なんて、小さな街です。同時代の京都とは、くらべるべくもありません。都市規模は、京都よりずっとおとっています。サンパウロやり

オデジャネイロとくらべた場合のブラジリア以下だったのではないのでしょうか。しかも、鎌倉はブラジリアのように首都機能を勝ちとってもしなかった。そんな時代を、どうして鎌倉時代とよばねばならないのでしょうか。

それは、関東の現政権が、関東の歴史を大きく美しくえがきたがったからです。歴史をゆがめ、自己を正当化したかったからなのです。そして、現関東政権は、関東の都合で書かれたこの歴史を、日本中におしつけることができました。それだけの権力、国民の歴史認識を左右する力が、関東政権には、そなわっているのです。その現政権をとりまく関東の歴史家には、と言うべきかもしれません。

世界から目を背けた 関東礼賛の歴史叙述を正したい

今の日本史は、この鎌倉時代がはじまる前ごろ、つまり12世紀から、中世をはじめます。そして、近世は江戸時代と、その前触れめいた時代をさすことになります。おわかりでしょうか。中世、近世という新しい時代は、勢力の中心が関東にうつったことをめじるしとして、はじめられることになっているのです。関東は新しい。京都を中心とする近畿地方は、古くさい。そんな価値観にもとづいて、今の時代区分はなされています。京都はおとっている、おくらしているという情操教育を、私たちはうけさせられつづけているのです。

西洋の中世史は、西ローマ帝国の崩壊から、はじめられます。帝国がこわされたあとに、東や北からゲルマン人がはいってくる。そして、ゲルマン人の国々をうちたてる。そんな5世紀のうつりかわりで、中世の開始を語ります。イタリアのみならず、イギリスもドイツもフランスも、そこから中世がはじまります。もちろんポルトガルもそうです。

東アジアにも、ほぼ同じような歴史はありました。3世紀には、ローマにもなぞらえる漢帝国が、ついでさります。そのあとには、北からはいつてきた異民族、匈奴や鮮卑たちが、小さな国々をつくります。東アジアにおける民族移動期です。匈奴の一部は、そのまま西へ移動し、ヨーロッパの東部へ、フン族としてあらわれました。そのフン族が、ゲルマン人をおしだし、ローマ帝国の解体をもたらしたのです。まあ、このフ

ン族＝匈奴説には、異論もありますが。

ユーラシア大陸には、民族大移動という共通の歴史が、ながれていました。私は、これをもって、ユーラシアの中世を語りたいと思います。3～5世紀に、ユーラシアは中世をむかえるのです。

ところが、今の日本は、12世紀の鎌倉時代から、中世史をはじめています。ヨーロッパも中国も、みな3～5世紀から中世をはじめているのに、日本だけ12世紀から開始させているのです。おかしいとは思いませんか。

関東で武士の都がいとなまれたことを、新しい中世としてことほぎたい。そんな思惑、関東を美化したいという欲望で、今の歴史はくみたてられています。そして、ユーラシアの世界史からは、目をそむけてきました。ユーラシアとならぶことより、京都を足蹴にして鎌倉をほめることが大切だというわけです。

私は、こんな歴史をあらためてほしいと思っているのですが、どうでしょう。